

<報 告>

中国白話小説における産婆像 —中国白話小説『金瓶梅』から—

A Profile of Midwives Described during Ming Dynasty in Spoken Chinese Language
—From Jin Ping Mei Written in Ming Dynasty in Spoken Chinese Language—

藤原 聡子*
Satoko FUJIHARA

キーワード : 金瓶梅, 産婆, 三姑六婆
Key Words : Jin Ping Mei, Midwife, San gu Liu Po

I. はじめに

16世紀に登場した中国白話小説「金瓶梅」は人間の性と金に対する欲望をテーマとしている文学である。従来中国人は、その伝統的な規範意識から、歴史記述や地誌・文学・個人の記録の中でさえも、性について表現することを控えてきた。従って白話小説「金瓶梅」は、その文学的な価値を別として、特異な資料としての価値を保持している。

白話小説とは話し言葉で書かれた小説という意味で、文言で書かれた小説に対して使われる文学上の分類用語である。16世紀以後、中国人の大部分が現在でも日常的に使う話し言葉が数多くこの小説中に存在し、その諺や単語は現代の生活の中に染み込んでいる。またこの小説が文革中発禁処分になるまで三百年余の間読み継がれた理由は、簡明な話し言葉を用いて記述された以外に、人間の欲望を真正面に捉え、この小説の中に現在に至るまでも共通する風俗と人情を見いだすことができ、読者に深い共感を与えることに成功したからである。

そして個々の主要なる登場人物は勿論のこと、この小説の背景の一部として表現された産育風俗や、主人公達の性にかからむ職業婦人達の形象は、作者の細部にわたって神経の行き届いたリアリティによって、近世の人物像と風俗を彷彿とさせ、その姿と意味について、現代人の興味を強く喚起するものがあると考えられる。

私はこの「金瓶梅」の記述のうち、とくに産婆を中心に、文中に現れるその人物形象と出産風俗と

を紹介しながら、中国の性に関わる伝統的な職種との関連を考察し、その姿・役割を見つめ論じたいと考えている。

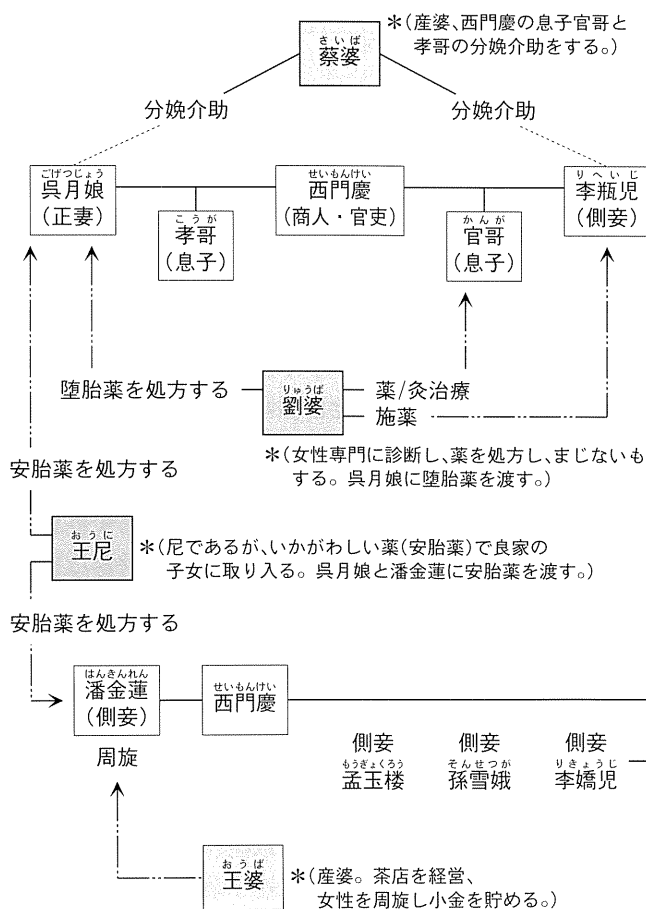


図 西門慶の正妻と側妾、西門家の子女をめぐる職業婦人達

所 属 : *国際医療福祉大学 保健学部 看護学科
受 付 : 1997年3月31日

表 金瓶梅中の産俗関係場面とその内容

月娘：呉月娘、金蓮：潘金蓮、玉楼：孟玉楼、瓶児：李瓶児

第2回	第12回	第14回	第17回	第21回	第27回	第29回	第30回
王婆の来歴の説明あり、腰抱き姿・取り上げ姿・色の取り持ちをする。作者は王婆を非難する	劉婆の来歴説明。夫は占い師、自身は針灸も行う	馮婆の来歴説明、自身は子供は生まないが仲人口はきく。	馮婆、李瓶児と蔣竹山の仲を取り持つ	月娘、星に懐妊を祈願する	李瓶児、たわむれる西門慶に仕方なく懐妊を告げる	金蓮の寝衣、入浴シーン	李瓶児の陣痛が始まる。草紙の記載
第30回	第30回	第31回	第33回	第33回	第33回	第33回	第34回
蔡婆登場。当時のお産の様子。用意する物、定心湯、胎盤処置。名付け。洗三。作者は蔡婆を非難	乳母の選択。内祝いの品の記述	李瓶児床上げ、弥月の祝い	官哥ひきつけ、小児科医ではなく、劉婆に薬をもらって回復	月娘は劉婆を支持、西門慶は劉婆を嫌う	金蓮、床入りのための裾洗い	月娘階段に躓いて流産。劉婆の薬を飲んで馬桶に男の子をおろす。西門慶には知らせない	乳飲み子に贅沢な衣装を忌む風習
第37回	第39回	第40回	第41回	第51回	第53回	第54回	第68回
王六児の娘の嫁入り支度に馬桶の記載	官哥を道士の弟子にさせ、厄除けを祈る。子孫娘娘の記載	月娘、王尼より安胎薬の話聞く。作者は王尼を非難する。	月娘、官哥の嫁を喬大戸の妾腹の娘との縁組みをとりまとめ。西門慶不服	李瓶児、産後の不正出血、西門慶に言われて裾洗いをする	月娘、安胎薬を飲む。官哥引きつけ。祈祷師と劉婆を呼ぶ。	李瓶児、家庭医の任医官の診察を受け、血山崩との診断。	劉婆、官哥を診察。
第59回	第59回	第60回	第61回	第62回	第72回	第75回	第75回
金蓮の愛猫が官哥を引っ掻いて、官哥、驚風を起こす。劉婆は灸を据えるが効き目なし。	官哥死。	李瓶児血山崩。任医官呼ばれる。	李瓶児、馬桶に大出血。任医官、胡太医、何老人、趙太医の薬効なし	官哥の乳母如意が李瓶児の死にあたって月娘の腹の子の乳母になる。	金蓮裾洗いをすませる	作者身重の月娘がお経を聞くのを戒め、胎教を記す。	孟玉楼病氣。丸薬を二つ貰い蠟をはぎ取る。金蓮、安胎薬を飲むが床入りをじゃまされる。
第75回	第75回	第76回	第76回	第76回	第76回	第79回	第79回
月娘腹立ちのあまり腹痛と頭痛がする。馬桶に腰掛け、子供を墮ろそうとするが墮りない	月娘任医官に診察を受けるために身支度をし冠をつける	月娘、医官と向かい合って診察を受ける。	温秀才の妻はめったに外にでないが、夕方に馬桶の掃除をする事を記載	西門慶痰の熱で腰痛	腰痛で西門慶任太医の薬を飲む	王六児、裾洗いをする	西門慶痰の熱で死亡。月娘お産。草紙を探すふりをした李嬌児が金を盗む。玉楼がお産のため馬桶を用意する。産婆の謝礼は銀三両
第79回	第80回	第82回	第83回	第84回	第86回	第90回	第91回
月娘が洗三の日に産婆に絹の着物を一着与えることを約束する	月娘三七日に床上げ	金蓮中庭で小用を足す	秋菊、小用を足すため馬桶を使わず、中庭トイレまで出た際、金蓮の醜行を発見	月娘泰山娘娘に願解きに出かける	金蓮、墮胎薬を飲んで馬桶に六ヶ月の男の子を産み落とし、廁に捨てる。	墓参りのあと孝哥が発熱。劉婆の診察と薬	玉楼湯に入る。

II. 「金瓶梅」中の産俗場面紹介とその表現の詳細さについて

1. 産婆の登場

「金瓶梅」という文学の中で産婆という職業を持つ女性の登場回数は、物語全百回のうちの三回と少ない。産婆は小説に登場する職業を持つ様々な婦人達、妓女・遣り手・下働きの女中・小間使い・乳母・女衞・茶店の主人・尼僧の中でも恐らく最も登場回数の少ない職業婦人の一つである。しかし彼女の仕事の内容は他の白話小説、おそらく同時代そしてそれ以前の時代のジャンルの文章の中で、最も明確にその姿が書き分けられているといっても過言ではない。

一回性の人生を扱う小説のなかの、出産という行為のさらなる稀少性から言って産婆の登場回数が少ないのは当然であろう。しかも、中国の伝統的文学では性を扱わないという大前提がある以上、その性の結末を時間的流れに従ってリアルに記述する必然性がないであろう。産育風俗や産婆像が殆ど記載されていないのはむしろ自然のことと言わねばならない。史記以降、瑞祥の夢を見た女性が皇帝となる人物を産むという記述はあるが、その皇帝の出生を取り上げた職業婦人の記述はない。乳飲み子の体に吉祥の印があってその幼児が榮達を極めるという話は存在しても、その乳飲み

子と母親が生活しているはずの産屋がどのような設えをもつかや、母親のお産の経過についての記事は存在しない。これらの内容を記述するのは性に関わることであり、物語の書き手であった中国の知識人・士大夫が男子の面目を失うタブーであって（女性ほどの時代においても公式の書き手ではなかった）、そのタブーは千年以上も公式の文章、文言の中で堅固に保持されたからである。しかし、例外的に16世紀の堂々たる知識人笑笑生によって書かれた「金瓶梅」では様子が異なる。たいへん詳細に出産場面を中心に性の風俗が記述されているのである。

「金瓶梅」第30回、主人公西門慶の六番目の愛妾、李瓶児の出産シーンがそれである。ここでは正妻である呉月娘を始めとして他の愛妾との宴会のさなか、李瓶児の陣痛が始まる。

『蔡婆さんは子供を取り上げると、臍の緒をかみ切り、胞衣をも埋めてしまい、定心湯を煎じて李瓶児に飲ませました。そうして子供の始末がちゃんと片ずくと、月娘は産婆を奥へ呼んでご馳走し、帰りがけに、西門慶はこれに五両銀を与えたうえ、洗三の朝にはさらに緞子を一びき差し上げようと約束いたします。蔡婆さんは厚くお礼を述べて帰ってゆきました。』¹⁾

この記述中、胞衣(胎盤)の処理について、1991年

発行の「海州民俗志」²⁾に次のような説明がある。『胎盤は人の根元である。根は地中に深く潜りこませて成長させねばならない。家の敷居の地面に埋めるか、父母の寝室の前の地面に埋めれば、男の子供は大きくなっても家を離れない。父母の寝室の側らにあつて父母に尽くし、他郷にあつても父母を慕うと言う意味である。』³⁾ また定心湯については同書に次のような説明がある。『子供が生まれたのち、産婦が初めて食べねばならないものは、おもゆである。又の名を毛米粥という。このおもゆの椀には箸を横に置き、箸の上に殻を剥いた二つの固茹^{かたゆ}で卵を置く。産婦は箸を取るとき卵を椀の中に落とし、卵を粥と一緒に飲み下し空腹を満たす。二つの卵は産後の腹痛を鎮め、次の懐妊を可能にすると信じられている。この粥の米は必ず自家製のものをを用いる。人から借りるとその借りた家が貧窮すると信じられている。その後一ヶ月は胡淑と砂糖を混ぜた湯ざましを毎日飲む。これも後陣痛を鎮めると信じられている。』⁴⁾ また洗三は『洗三、嬰兒出産後三日目の午前中に、産婆あるいは経験豊かな老女が嬰兒の体を拭くことを言う。富裕な家では清潔な布か香油を浸けた綿で拭く。老女は男の子の陰部を拭くとき、偉い役人に出世するよと、縁起のよい文句を唱えねばならない。終われば老女に金を取らせる。』⁵⁾

この注釈に用いた「海州民俗志」の海州は、中国江南部、とくに揚州を指しこの地方一帯の清末期までの風俗を紹介し、現在ではわかりにくくなっている産育風俗について解説している。小説「金瓶梅」の舞台は現在の山東省であり時代は宋末期に設定してあるが、その風俗は考証家達によって、作者の同時代である16世紀明朝の大都市のものであることが証明されている。この時代は南北の運河が確立され、陸上交通も頻繁であり、都会人である作者笑笑生は南北の風俗に詳しく、文章中にそれらを風俗も織りまぜて紹介している。文中の風習の一部の中には中国でつい最近まで行われていたものも存在する。

2. 褥婦が風に当たる風習の禁忌と出産必要物品

冒頭の「金瓶梅」の出産シーンは他の文献に類似の記事がないだけに、出色といえる。ここで「金瓶梅」に出てくる出産風俗について、どのような内容があるのか以下トピック的に紹介したい。

伝統的な中国の分娩にあたってその産屋に関しては、あらかじめ風も通さない、また遮光された暗室を用意し、産婦はそこに籠もる。この部屋は男子はおろかまだお産を経験しない女性も出入りはタブーである。「金瓶梅」第33回で呉月娘が流産したとき「流産はお産より大変、風にあたってはいけな」という側妾の孟玉楼の注意がある⁶⁾。産婦が風に当たる事は絶対に

避けるべきものであった。現在の中国の人々でも、風に当たることを忌む風習がある。筆者の中国における友人は、現在中国東北部に住んでいるが、その義姉の出産に関して「一ヶ月の間、外出を控えていた。」と述べて、その理由として外の風にあたってはならないからだ、とする。近世中国の婦人達は、陣痛が始まると、このように風に当たらずに設えた産室の中で、蒲団を高く積みあげ、その間に眠らぬように蹲^{うずくま}っている。分娩にさいし、産婦がまず用意しておかねばならないのは、汚れや悪露を拭う草紙(ちり紙)である。30回の李瓶児の出産で、呉月娘が自分のお産のために以前から用意していた草紙を差し出すし⁷⁾、79回呉月娘が急に産気づいたときには、お産を手伝う立場の側妾李嬌児は、『ちり紙が見えないので、探しに行くわ』⁸⁾と述べている。襦袢やちり紙は、正妻が自分のためと、側妾のために以前から配慮しておかねばならないものであった。「金瓶梅」の世界では、お産は家族の事実だが、生まれるまでは決して公のものではなく、5ヵ月以前に子供が降りることは非常な恥で、妻から夫に告げられることもない。これは後の白話小説でも同様の記述がある。「金瓶梅」には月足らずの胎児を夫に内緒でこっそり自分で始末する記事がみられる。また馬桶と呼ばれるものが「金瓶梅」にしばしば登場する。33回で呉月娘が新築の家屋を見物しているときに階段を踏み外し五ヶ月の子を流産する。腹痛と出血がはじまり、流産とわかってもなかなか胎児がおりてこないため、呉月娘は劉婆(後述)の薬(子宮収縮を促す作用があると思われるもの)を飲んで、室内にあった馬桶に胎児を産み落とす⁹⁾。また61回には李瓶児が馬桶に蹲り激しい出血(産後の不正出血)を経験するという記述がある¹⁰⁾。79回呉月娘の出産では側妾の孟玉楼が馬桶を用意して呉月娘の後ろに侍立しているという記述¹¹⁾があり、85回で金蓮が馬桶中に男児を産み落とす記述がある¹²⁾。このように「金瓶梅」中、お産にさいしてたびたび登場する馬桶は、蓋のついた室内便器、つまりおまるである。最近中国で出た「金瓶梅」の風俗を研究した随筆集である「金瓶梅60題」によれば、『従来中国北方では、室外に毛廁、毛坑などと呼ばれる便所をしつらえていた。室外のものは土を掘りその中に甕^{かめ}を容れる。ある家では甕はなく露天だが、他には囲いや屋根をつけて甕の上に木板をおいていた。一方南方では馬桶と呼ばれる簡易便器を用いていた。金蓮・呉月娘・李瓶児の各部屋には馬桶がしつらえられている描写が存在する』¹³⁾とある。馬桶は中国の嫁入り支度の物品でもある。第37回で西門慶が崔執事に周旋した妾の嫁入り支度は、馬桶が用意されていた¹⁴⁾。どうしてこの馬桶を嫁入り支度に用意するのかという

理由について「海州民俗志」では次のように記されている。『馬桶は金桶、子孫桶と呼ばれ、馬桶内部には赤い塗り箸がしつらえられる。これは中国音で箸子＝快子クワイズと同音で子供に恵まれることを意味する。さらにこの中に生の棗、栗、落花生を詰める。それは茄でる等熱を加えたものは芽が出ない(子を産まない)からだ。花嫁行列では、馬桶は赤い布に包まれ、晴れがましい堂々たる存在で、馬桶を持つ人は新婦側の信頼を得た人に限られる。そして新郎新婦のベットの傍らにおかれる。新郎新婦の部屋を見に来た子供達が、馬桶の中の菓子を探して食べることを、模馬桶モーマートンと呼ぶ。』¹⁵⁾ この争って菓子を奪い合うことが子供を産む瑞祥となるのである。ところで、現在の中国では殆どこの馬桶の意味は忘れられている。前述の中国東北部に住む友人に、馬桶がお産に関係ある風習であることを知っているかと聞いたところ、彼女は全く知らなかった。馬桶は現在でも南方の上海のような大都市で室内便器として使われているが、出産を意味するものとしては白話小説中のみの記述だけである。

3. 乳母選び

乳母選びについて「金瓶梅」の記述を紹介する。『西門慶は赤ん坊をみてくれるような乳母はいないものかと、小者しゅうせんやに周旋屋を呼ばせようとしていると、ちょうどそこへ、薛嫂せつせうが乳母をひとり連れてきました。貧乏人の女房で年は三十、ついちかごろ、子供を亡くしてまだ一月とたたず、亭主は兵隊だが、暮らしが立たず、出征することになったら、誰も養ってくれはしないだろうと心配して、6両でいいから売りたいという。(呉)月娘が会ってみるとなかなかござっぱりにょいとしていたので、「6両出して、お引き取りなさい。如意という名前にして、朝晩、あの子のめんどうをみさせたらいいわ。」と西門慶に話し、さらに別に、馮ばあやを呼び寄せて産室で使い、毎月銀五銭をやって着物のめんどうをみさせることにしました。』¹⁶⁾

銀6両は当時一人前の女中を引き取るのと同等の価格であるから、思い切った散財である。如意は豊かな胸を持つ乳母であり、李瓶児の乳飲み子の官哥かんがを養うが、後に呉月娘の子が生まれると、李瓶児の遺言で呉月娘の子供も預かることになる。このように乳母は、大家族制度を取る中国では、そのまま家族の使用人として、一生主人に使えることになり、そのような例が、またその後に見られる白話小説にしばしば登場する。

以上のような産俗場面の豊かで詳細な表現に支えられたこの小説は、人物表現においても非常にリアルである。この小説における産婆の性格もよく書き分けられている。

では「金瓶梅」において産婆はどのように描かれて

いるのか、他の登場人物、分娩介助や医業に関係する人々と比較しながら述べてみたい。

Ⅲ. 「金瓶梅」に登場する産婆の形象

第30回、西門慶の正妻と5人の側妾達のうち、この物語の主人公の1人である李瓶児が最初に西門慶の息子を分娩する。その際の「金瓶梅」にある産婆自身の口上(登場人物が自身を紹介する言葉)を紹介する。

『わたしやお産婆蔡とは申す、二本の足で駆けずり回り、紅や緑で着物は派手に、いろんなつけ髷よこっちょにのせ、絹の飾り輪いとあざやかに、黄色いハンカチちよとのぞかせて、門にはいればお花をねだり、腰をかければご馳走せびる、貴いお家の奥様だろと、皇族さまのお妃だろと、望みどおりの姿にさせて、着物ぬがせて仕事にかかる、横産ならば刀で割いて、難産ならば手でつまみ取る、臍の緒だろとまた胞衣だろと、あわてりやつかんでみなひきちぎり、生きてりや洗三にやっっては来るが、死んだらそれきり姿を見せず、おかげでとくいも多いけれど、呼ばれりゃいつでも不在がち。』¹⁷⁾

この口上の後に、冒頭(Ⅱの1)で紹介した詳細な明時代の出産風俗場面が展開する。

この産婆である蔡婆の口上を読むと、西門慶待望の第一子誕生という、劇的な出産場面に付き添って介助する婦人の資性の表現が、じつに奇怪であることに気が付く。

この口上にあるつけ髷は明清の女性が日常的に用いるものであるが、これを不美人が落とし髷にしたり、目立つように装うと実に自堕落な感じを与える、と清代の随筆家李漁が「閑情偶寄」に記述している。「金瓶梅」に登場する産婆・蔡婆はそのようなつけ髷をごてごてと付け、お化けと言われても仕方ないような派手な装いをし、年かさな経験のあるまじめな女性とは描かれていない。さらにはこの口上に記される彼女のお産の技術も実にいいかげんである。また彼女が産婆に必要な特別な資格を有しているかについて、いかなる記述もない。彼女が物欲に強いことは、この登場シーンの口上以外にも、後に呉月娘が出産するときにもこの蔡婆が呼ばれ、前回の李瓶児のときの額より少ないことに愚痴をこぼすという態度を示すことでもわかる。

彼女は、本来ならば決して由緒正しい家の奥向きに入るべきではない、品性卑しい女性である。ところが、彼女の口上によれば、貧家・貴賓のわけへだてなく、出産を待つ女性の家に入出入りできるとされている。

彼女は皇族の女性でも貧家の女性でも垣根を越えて飛び込んでいく移動の自由を持っている。この自由さ

は恐らく、この小説における産婆の特色の一つである。そして、彼女に被せられた、作者の悪意ともとれる滑稽で俗悪で奇怪な仮面もまた、この小説に現れた産婆の特色と言える。

作者は何故この産婆に奇怪な容貌を与え、滑稽にしたたのたのだろうか。この小説のもう1人の産婆、王婆についてみてみたい。

Ⅳ．周旋屋である産婆—王婆について

王婆は茶店を切り盛りする女性である。主人公西門慶は通りを歩いていて偶然に見かけた金蓮に一目惚れする。この一件を金蓮の隣人で西門慶自身ともつきあいのある王婆に取り持つよう白羽の矢を立てる。原文訳の王婆の紹介は次のようである。

『もともとこの、茶店を出している王婆という女もまっとうな人間ではなく、長年、女のとりもち、結婚の仲立ち、商売の仲介、女の口入れをやっている。とりあげ婆もできれば、腰抱き婆もできる、いやがらせも上手という女。まだもうひとつ言えないことがある、それは鬘を黒々と染め、頭にはびんつけを塗りたくっているということ。まったくこの婆の腕前のほどは底がしれません。』¹⁸⁾

ここにも、先の蔡婆にも見られたように、外見の奇怪さが強調された品性卑しき女性が登場する。(古代～近世の中国の詩文では、女性の容貌のリアルな表現を抑え、衣類、髪などの細部の表現によってその資性を表すことが多い)

注目すべきなのは、原文の『又会収小的、也会抱腰』¹⁹⁾彼女がさまざまな商売の他に産婆の職業もしていることを示している。彼女はすでに夫を亡くし、頼みにしている息子は他郷にいる。経営する茶店は常連には常に付け払いを許す、儲けの少ない商売である。彼女の主な収入源は、平たく言えば口入れ稼業によるもの、つまり人買いの手数料である。豪商西門慶の出自は破落戸であるが、成り上がって大通りに菓の店舗を構え、正妻以外3人もの女性を蓄妾するに至る。側妾は人身売買によって成り立つもので、その仲介が産婆を標榜する王婆の裏の職業であった。西門慶の奥向きに出入りするこの種の職業女性達のうち、物語ではこの他王婆と同じ性格を持つ人物として、孟玉楼を西門慶に娶せた薛嫂という人物が描かれている。薛嫂は孟玉楼を周旋した礼金として、西門慶から銀一両、そのあと祝いの餅をせしめる。また何かにつけ西門家にご機嫌伺いにあがり小金を稼ぐのに余念がない。その同業である王婆はさらしたたかたかた、西門慶に取り入るため持ち前の三寸の舌を振るって西門慶に金蓮攻略法をさずけ、両人の密通の場所を提供する。その後、

尻込みする金蓮を叱咤し、両人の不義に気づいた金蓮の夫・武大に対して砒霜を飲ませるとい毒殺計画を立てて武大を殺す。王婆の性格はきわめて明快で彼女の人生の指針は金である。第2回の王婆が西門慶の下心を見抜く場面では王婆の独白が以下の如く漏らされている。『あの極道者め、せつせとかよって来やがる。ようし、あの鼻先に甘い砂糖を塗りつけて、それをなめられないようにしてやろう。あいつは県庁で甘い汁を吸ってやがるのだから、こんどはこちらさまのところへ来させて、税金を納めさせあいつの遊び賃をせしめてやらなくちゃ。』²⁰⁾ 王婆は物語の結末で、武大の弟武松に復讐され、金蓮とともに非業の死を遂げることになる。

彼女が産婆でありながら、きわめて外聞の悪い余業、人身売買を行っていたことは、非常に示唆に富むことと言える。産婆という職業が医療従事職として独立したものではなかったこと、近世中国の一連の結婚制度の中で、産婆という職業の意味を考えるべきであることをこの物語は示唆している。

この物語の2人の産婆の職業を持つ婦人のエピソードから、筆者は作者の形象した産婆の特徴を次のようなものだと考えている。

- ①女性であれば特別な資格を有さなくても経験のみで職業とすることができる。
- ②性に関連した様々な職業を営み、産婆はその内の余業の一つである。
- ③貴賤の家をわけへだてなく移動できる自由を持っている
- ④作者から貶められ、喜劇的な仮面を被せ鄙視されている

この産婆という職業は後述するように、作者によって性を扱う三姑六婆という呪術的民間医療集団といべき女性達のなかに組み込まれている職業である。この集団の性格を明らかにする代表的人物を次に挙げたい。

Ⅴ．劉婆及び王尼の形象

劉婆は正式な医者ではないが針も打てるし、簡単な病気には薬も処方する。彼女は西門慶には信用がなく、殆ど憎まれていると言ってよいが、正妻呉月娘をはじめ西門慶の奥向きには絶大な信頼を勝ち得ている。

第75回で妊娠中の呉月娘が金蓮と諍いをおこし気分不良となり、呉月娘は劉婆の薬を飲みたいと思うのだが、西門慶に説得され嫌々ながら男性医師の診察を受ける、という筋立てとなっている。

女性が男医師の診察を受ける描写としては、清代の

白話小説「紅樓夢」に登場する²¹⁾のだが、貴族の婦人の場合、家族以外の男性に対しては例え医者であってもその容貌を見せないという制約があり、病を持つ婦人は男医者に御簾越しに手を差し出して脈を診せている。「金瓶梅」では商家の妻妾を扱うため、この制約は簡略化されるが、それでもまず病気となれば、西門慶が書状を持たせ小者を仕立てて医者と呼ぶ。病人である呉月娘は、このために着替えをし髪を結び化粧をして医者脈・舌(場合によっては顔)を診せる。しかる後に診断料としてお礼(これは女性達の奥向きの金でなく西門慶の家計の公費に計上される)をはずみ、医師の処方箋にある薬を別に購入するというわずらわしい手続きを踏まねばならない。こうなると当然呉月娘ならずとも、女性にとって男性医師の診察に対して抱く鬱うしい気持ちは想像にかたくない。また清時代の風俗を詳細に紹介した「清俗紀聞」²²⁾にあるように、お産の際や乳児の病気は婦人科・小児科の男性医の対象にならないという女性達の一般通念もこのころから存在していた。従って59回で西門家の跡取り息子の官哥がひきつけを起こしたときは、女達の思案によって、掛かり付けのホームドクターは呼ばれず劉婆の薬を飲ませ灸を施すことになる。(このときあわれな乳児はそのまま死んでしまい西門慶の激昂を買う。)

女性達がこれらの医者疎むのは男医者の診察を受けるのに煩瑣な過程を踏まねばならないという理由以外に、劉婆が経験を積んだ女性であること、さらにその夫は占いを業にしており、ある種呪術的な技量を持っていて信頼され、女性達の心になかった所があったからである。12回の劉婆の登場は次のようである。

『呉月娘は小者をやって、家にしょっちゅう出入りしている劉婆を呼び、これに(金蓮を)診せました。「こりゃ奥さん、ちっとばかり、怨霊にとりつかれて、それで気分がくさくさするんです。こいつをとり除けないことじゃ、頭痛はするし、胸はむかむかするし、食欲もおこりませんで」劉婆はそういいながら、薬の包みをあけて、黒い丸薬を二服置き、それを晩に生姜湯で飲めとすすめてから、また、「明日うちの爺さん(夫)を連れて来て、あなたさまに今年災いがありはしないかどうか、診させて進ぜましょう」(金蓮が)「おやあなたの旦那さん、占いもおやりになるの」「あの人、目は見えないけれど、あれで二つ三つ術を心得てるんですよ。第1に、陰陽道と占いが得意で、人のわざわいをとり禳う。第2に、鍼灸ができて、できものを治す。第3に、これはちよっと内証じゃが、人にまじないもやってあげておりますんで。』²³⁾

呪術と薬を持って西門慶の奥方達の信頼を獲得したのは独り劉婆だけではない。「金瓶梅」50回で呉月娘

は、常日頃親交のある王姑子(尼僧、以下王尼と呼ぶ)から安胎薬(子どもを授かるといういかがわしい秘薬)をもらい男の子の胎盤を酒で洗って灰にし、壬子の日を選び、飲むことを説明される。仏に使える王尼はこの種のことを余業として信心深い良家の婦人たちから金品をせしめていた。王尼はこのときお礼として呉月娘から三銭の銀を与えられる。西門慶はこういういかがわしい尼達を家に進入させることをきらい、しきりに妻に訓戒をたれるのであるが、呉月娘はこの薬で遂に懐妊する。さらに尼達は李瓶児の息子が病気になる、お経をあげて礼金をもらい、ますます西門家に食い入っていく。

劉婆が男医者のもとは違う処方箋の記されない薬(劉婆自身が持ってくる薬)と、ある種の呪術的技量を併用しながら、西門家の女性達の心身の欠かせないアンダーグラウンドな医療顧問になっていく経過は、王尼と同じようである。

これに対する物語の語り手である(作者の物語上の分身。白話小説は講談のように講釈師が物語を語るという体裁を取る)笑笑生の評はこうである。『さて皆さん、お聞きください、およそ大小どんな家でも、尼僧に乳母に口入れ婆なんてものとは、どうかかかわりあいにならぬがよろし。』²⁴⁾

物語の語り手はここで、前述した職業婦人達を、あるカテゴリーにはめている。この言葉によって表向きには、王尼・劉婆という呪術的女性の及ぼす災厄、王婆という口入れ屋(産婆でもある)の力について言及し、西門家にはよい結果をもたらさぬことを予言している。見方を変えると、これらの女性達が男主人公達に忌み嫌われながら女主人公たちの出産・病気・墮胎に関わる重要な鍵を握り、しかも道化的な風貌で場面展開の要所に存在していることはまぎれもないことである。これらの女性がいなければこの物語は存在しない、それほど重要な役割をしていると考える。

このような大通りを闊歩し、貴賓・貧家を分け入って世情に通じた尼達、口入れ屋達によって、西門家の女性達に様々なる情報がもたらされたとき、物語は大きく展開する。

正妻呉月娘は、金と欲のみを追求する西門慶をときには諫め、理性ある配偶者として振る舞い、多数の側妾や義理の娘夫婦、小間使い女中などによって構成された複雑な大家族を統合し、それらに公平に対処する能力を持つ主婦である。しかし彼女の強く渴望するのは自らの男児の出産である。口入れ屋、尼、産婆達は、この強い渴望を種に、貞淑な呉月娘のような女性を、得体の知れぬ薬を飲んで安産祈願をする狂信的な婦人に変身させるトリガー(引き金)の役目を果たす。

そしてこのトリガー達は作者によって道化的仮面をかぶせられる。このような道化的な形象は恐らく、「金瓶梅」において初めて意識的に表現されたと思われる。

VI. 結語

王婆・王尼・劉婆・蔡婆について、作者は「金瓶梅」第56回で三姑六婆と表現している。この言葉の典拠は、明時代のエッセイ集で、陶宗儀の書いた「南村輟耕録」中にも存在し、三姑は尼姑(尼僧)・道姑(女道士)・卦姑(巫女)、六婆とは牙婆(口入れ婆)・媒婆(取り持ち婆)・師婆(巫女)・虔婆(遣り手婆)・薬婆(薬売り婆)・穩婆(産婆)とされている。これらのカテゴリーでまとめられた言葉は、家庭に進入を許してはならない職業の女性を表す言葉である。これらの職業は連関しており、お互いに職業を入れ替わることもある。これらの人々は、結婚が占いの八字で確認された上で結ばれ、仲人によって祝福されねば公式な結婚と認められないという厳しい契約の社会の中で生まれた、公然と性に関わる職業であった。史記の作者を嚆矢とする歴代中国の厳格な歴史家達は、孔子が仲人のいない結婚をした両親から生まれた子供であったことを決して見逃さなかった。この職業が実質上の売買結婚、金銭と密接に関わっていたことから、知識人には必要悪として認められていた。「金瓶梅」では男児を希求する妻達に対して、家庭を破壊させる因を作る移動の自由を持った女性達の力に対する作者の根源的な恐れが示されている。作者は憎悪をこめてこれらの人について述べている。『寄せるまいぞえ三婆を／裏の戸口もしめておけ／庭の井戸水出口をふさぎゃ／けがも少なく福が来る』²⁵⁾と。

吉川幸次郎は「金瓶梅」は中国の文学史上初めて中国の人々の性について語った物語である、と述べている²⁶⁾。「金瓶梅」の作者はこの性について筆を揮うとき性についてのきわめて特殊な役割をした人々についても述べなければならなかった。そしてついに中国文学史上初めて産婆業に関わる女性が描かれることになった。この職業婦人のグループが知識人である男性達にいかにも悪意をもたれていたかは、極めて興味ある事実である。封建的結婚制度によって彼女達は生み出され、彼女たちによって現実に迷信などの多大な害毒をもたらされた。しかし中国の半分の人口、女性達の支持を得てそれによっても支えられていたことも無視できない事実であると考える。

【引用・参考文献・注】

- 1) 笑笑生。(小野忍, 千田九一訳) 金瓶梅. 第11版. 平凡社, 東京, 第30回, 352 (1994).
- 2) 劉兆元. 海州民俗志. 江蘇文芸出版社, 中国, (1991). (同書の原文訳は藤原による)
- 3) 同上. 4.
- 4) 同上, 8.
- 5) 同上. 9.
- 6) 笑笑生。(小野忍, 千田九一訳) 金瓶梅. 第11版. 平凡社, 東京, 第33回, 390 (1994).
- 7) 同上. 第30回, 350.
- 8) 同上. 第79回, 239.
- 9) 同上. 第33回, 390.
- 10) 同上. 第61回, 349.
- 11) 同上. 第79回, 239.
- 12) 同上. 第85回, 292.
- 13) 陳詔. 金瓶梅60題. 第1版, 上海書店, 上海, 115, (1993).
- 14) 笑笑生。(小野忍, 千田九一訳) 金瓶梅. 第11版. 平凡社, 東京, 第37回, 15 (1994).
- 15) 劉兆元. 海州民俗志. 江蘇文芸出版社, 中国, 52 (1991).
- 16) 笑笑生。(小野忍, 千田九一訳) 金瓶梅. 第11版. 平凡社, 東京, 第31回, 352 (1994).
- 17) 同上. 第30回. 350.
- 18) 同上. 第2回, 25.
- 19) 蘭陵笑笑生. 金瓶梅. 齊魯書社, 中国済南, 56 (1991).
- 20) 笑笑生。(小野忍, 千田九一訳) 金瓶梅. 第11版. 平凡社, 東京, 第2回, 28 (1994).
- 21) 曹雪芹. 紅樓夢
- 22) 中川忠英. 東洋文庫62清俗紀聞2. 卷之六 生誕. 平凡社, 東京, 67 (1966).
- 23) 笑笑生。(小野忍, 千田九一訳) 金瓶梅. 第11版. 平凡社, 東京, 第12回, 133 (1994).
- 24) 同上. 第13回. 136.
- 25) 同上. 第13回. 136.
- 26) 吉川幸次郎. エロスの東西, 講談社, 東京, 71~75, (1977).